

Title	近世ベトナム鄭氏政権の成立と展開
Author(s)	蓮田, 隆志
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46568
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	蓮田隆志
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第19940号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	近世ベトナム鄭氏政権の成立と展開
論文審査委員	(主査) 教授 桃木 至朗 (副査) 教授 荒川 正晴 助教授 青木 敦

論文内容の要旨

本論文は、現在の北部ベトナム地域で16世紀中葉から17世紀前半にかけて展開した政治史を、この時期に断絶から再興し内戦に勝利して全域の支配者に返り咲いた黎朝(1428～1527、1532～1789年)、とりわけその実権を握った鄭氏一族の側から、再構成しようとしたものである。序ではまず、東南アジア近世史や15～18世紀ベトナム史などの研究動向を、ベトナム、日本、英語圏など学界ごとの問題関心の差異に注意しながら整理する。「封建制の衰退期」という古い像に代わる、より積極的な近世史理解が提起されながら、紅河デルタの文人とタインホア(清華)地方の武人の対立抗争などの大きな図式が優先され、史料にもとづく具体的な政治過程の復元がひどく遅れている状況と、その背後にある史料学の低迷が、そこで問題にされる。筆者はあえて、支配集団の人的構成の変遷と、それを解明するための基本史料の文献学的考証という、文献史学の基礎に立ち戻って研究をおこなうことを表明する。この方針にしたがい、第1～5章および附章からなる本論が展開される。

第1～3章では、莫氏に帝位を篡奪された黎朝が、清華で復興し首都ハノイを奪還する過程を、政権の担い手に注目しながら追ってゆく。第1章ではまず、黎氏の子孫を擁立し「後期黎朝」を樹立したのは鄭維俊らのグループで、通説の阮滄は(後の阮朝の遠祖)は途中で合流して実権を握ったものだったこと、当時の政権は清華出身の「開国功臣集団」が中心となる、15世紀の構図を受け継いだものだったことが主張される。第2章では、阮滄の暗殺後に女婿の鄭検(鄭維俊一族とは無関係)が後継者となる過程を考察し、さまざまな地域の出身者を鄭検が個人的紐帯によって統合する新しい構造を検出した。つづく第3章では、鄭検の没後に後継者となった鄭松が、兄を葬り、また独自権力の構築に乗り出した黎朝皇帝をも除くことで権力を確立する過程、かれが父の旧臣と自己の近親者のバランスを取る様子、ハノイ奪還の一方で阮滄の子孫が南方に独自政権を樹立するという新しい動きの中で創出された、黎朝皇帝の守護者として鄭氏(王号を得る)を正当化する論理と、それを支える王府=宮体制の構造などが説かれる。

第4・5章は角度を変え、鄭氏の政権力を支えた特定の集団に着目する。第4章では、対外貿易や官僚人事の取り次ぎ役などに活躍した宦官が、非制度的な君主との結びつきではなく文官・武官とならぶ制度上の地位を背景に活動していたことを明らかにした。第5章では、「鄭氏の娘を代々めとる家柄」となった「良舎鄧氏」の勃興と、政権中枢への定着過程を検討した。

附章は、ベトナム史の基本史料『大越史記全書』の通行本である「正和本」と、存在は知られながら従来歴史研究に利用されていなかった「NVH 本大越史記本紀統編」(残簡)および「A4 本大越史記統編」の3者の関係を文献

学的に考証する。後二者が、散佚した「景治本」の系統を引く可能性をもち、「正和本」とは異なる歴史観に立脚しているが同様に後期黎朝の基本史料として扱おう、重要な文献であることが解明された（これにもとづき、上の各章で「A4本」をフル活用している）。

結語でこれらの成果をまとめ、王子たちが大きな権力をもちが世襲はできず有力傍系集団が成立しない、鄭氏権力の構造の独自性を論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文の評価されるべき最大の貢献は、利用可能な近世史料が増加し、現地渡航・調査も容易になった近年のベトナムの状況をよく活かして、従来の後期黎朝政治史研究にない史料利用のレベルを——堅実な文献学的考証の基礎の上で——達成したことである。この点を象徴する「A4本大越史記続編」や、鄭氏、鄧氏の家譜、第4章で利用した「文理侯陳公碑」など、首都の文書館での博搜の成果が見られるだけではない。第4章で利用した辞令書は、農村調査の貴重な成果である。本論文は、まだ少数だが世界の学界に最近現れてきた、「断片的史料による概論と大きなテーマのエッセイを事とする従来のベトナム前近代史研究」を変革しようとする動きの中の、尖鋭的な一部分をなす。

第二の貢献は、「大きなテーマ」の先行研究もよく咀嚼し、幅広い視野を示している点にある。「一國史」にとどまらない幅広さという点では、清華・乂安や北部山地など山地諸勢力への目配りもさることながら、とりわけ印象的なのは、日本、朝鮮、ベトナム三国の史料に現れる「文理侯」について検討した第4章である。対外関係の重視が叫ばれながら戦前戦後の岩生成一のレベルをなかなか越えない日本近世史や、ようやく対外関係に注目しはじめた段階にある朝鮮王朝史に対して、それらの学界が知らないベトナム碑文を用いた考証は、強い刺激を与えるものである。同様に、ベトナム歴代王朝の政治権力と正当性の変遷についても、従来の研究が集中していた15世紀と19世紀の間の、後期黎朝を扱う本論文は、示唆する点が多い。

本論文がもつ問題点としては、図表や注に関する説明不足や本文の不親切な表現など、技術的な瑕疵がやや目立つ。王府＝宮体制の議論はいくらか性急で、より詳細な検討がほしい。また、支配集団の構成は、家族・女性・ジェンダーの視点をもつことによって、よりよく解明できるであろう。たとえば、妻、姉、未亡人、乳母など政治史（特に後継者決定）で重要な役割を果たしうる女性が、本論にも登場している。

しかし、これらの瑕疵や期待は、本論文が達成した成果と意義を損なうものではない。よって本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと認定する。